

平成 28 年度 第 2 回政策討論会第二分科会要点記録

日 時	平成 28 年 8 月 16 日（火）午後 1 時～午後 2 時 9 分
場 所	第一委員会室
出席者	雪本 清浩（座長） 池内 矢一（副座長） 澤田 和代 松本 妙子 池田 啓子 稲田 悦治 中井 良介
欠席者	岸田 厚 井上 孝三郎

テーマ 「地場産業の発展について」

- ・ 地場産業の発展について議論を進めていくが、発展をどの様に考えるかで方向性が変わる。振興なのか、守ること（保護）なのか、人材育成なのかを定めた議論が必要と考える。
- ・ 地場産業（商業、工業、農業、水産業）をどの様にしたいと考えているのかを明確にすべきと思われる。
- ・ 本市では、岸和田市・岸和田商工会議所・泉州池田銀行による三者協定が結ばれている。産業振興に利用が可能であると思われるが、活用されていない。
- ・ 商品の消費を向上及び開拓させないと、事業の発展は望めない。（専門家の導入）
- ・ 岸和田の産業（商品）を知って貰う為に、更なる SNS の活用を進める必要が有ると考える。
- ・ 岸和田の伝統産業でもある 木綿・繊維産業は、昭和 40 年頃までは活発であったが 全国的に生活様式の大きな変化、海外からの安価な輸入品の増加等により、需要が低迷し、厳しい環境にあります。

また 従事者の高齢化による自然減が続く中で、様々な振興施策を有効に活用し、意匠開発や展示会等の需要開発を行っている事業者もある一方、婚礼家具の変遷（ビルトインへの移行）や住宅事情による生活様式の変化に伴う新しいニーズへの対応が遅々として進まないケースもあります。

本市の地域の産業を担っている中小零細企業も、例外ではなく、そのよう

な影響を受けていることに対して否定はできませんが、自ら様々な研究や努力を重ね、事業を継続している状況であります。

そのような事業所に何か光を当てるべく、討論できればと思います。

- 岸和田は海から山までの地形を生かして、多様な産業がある。

農産物では、ミカン、桃、水ナス、海産物にも恵まれている。加工食品のかまぼこ、魚肉すり身のでんぷらなどの製造会社がある。

工業ではガラス、レンズなど眼鏡、工業用のものまで製造されている。

岸和田の特産品として、なにかひとつ特化して力を注いではどうか。

例えば、淡路島ならタマネギを特化してたまねぎソフトクリーム、スープなどひとつを握って離さない商品開発をしている。

例えば、レンズにしても、ネックレスのループなどアクセサリにして、レンズにデザイン性に富んだ付加価値をつけ土産として販売するなど一工夫することも大事ではないか。

多様な産業、特産物に一工夫する商品開発に若い力やアイデアを提供してもらえるように岸和田産業高校や近畿能力開発大学校の学生たちとの連携体制をつくる。

そのことが産業の後継者づくりにもつながる。

そして、インターネットアプリなどを駆使して、人が集まり、にぎわう状況づくりをしてはどうか。

岸和田城周辺は「ポケモン GO」の影響でたくさんの人が毎日訪れている。そんな光景をみて、そんなことを思いついた。

また、岸和田城のボランティアガイドの話で岸和田の歴史と史物について改めて長い歴史と興味深い話に聞き入った。

その歴史を知った上で、紀州街道や城周辺散策をすると違った岸和田の魅力が見えてくる。

第一次産業、二次産業、三次産業が有機的に結びついて、岸和田の活気につながればいいと思う。

若い次世代を巻き込んで、岸和田の賑わいと活気が生み出せる提案ができればいいと思う。

- 桐ダンスの会社、仕事を続けていきたいが、子どもが後を継いでくれるかわからない。

ガラス製造会社に永年勤務の婦人、細かい検品作業で腱鞘炎になり、賃金も安くてやむなく退職する。

包近の桃づくり、肥料などの種類を変えたりと研究に研究を重ねてきた。雨の多い時は糖度も落ちたり、また今年は虫食いか、伝染病のようになり、4割は出荷できなかった家もある。

色々な状況を聞きながら、市として援助できることはないのか。

相談窓口はあるのかなど、支援策も考えてあげてはどうか。

- ・岸和田市で、一口に産業といっても、農林水産業から製造業、飲食、サービス業まで幅広くある中で、どのようなものを地場産業ととらえていいのか、はつきり分らない。

まず、討論に向け、共通の認識を持つために、知りたい、学習したいと思う。

農業も漁業も岸和田市は、府下では生産も多く、元気があるといわれている。しかし、それでも量的に、減少の一途をたどっているとのことである。

私の子供のころは、織布や毛布の織屋が多くあったし、チーゼルの生産も盛んで岸和田市の地場産業の一つだと言われてきた。

しかし、毛布といえば泉大津で、また、泉佐野市といえば、タオル生産が出てくるが、岸和田ではそのように言えるものでない。繊維関係の生産の多くが海外へ行ってしまった今は、残念だが、岸和田市の地場産業としていえるものとして残っていないように思う。

産業を取り巻く環境の変化に応じて、古くからの物作りの力を、視点を変えて発展させていく方法に着目していくことが必要ではないかと思う。

- ・地場産業の認識については、本市では繊維産業が急速に発展してきた。東洋紡績をはじめとする規模的にも大きい企業を中心に家内工業規模から様々な規模の経営形態があり、現在に至っています。

現在、繊維産業に携わる企業等では、その殆どが大手メーカー等の下請け・孫請けの範疇であり、独自の製品開発・市場開拓等に取り組んでいる企業は稀である。

一概に言えるか定かではないが、私が思うところでは泉州地域では大手メーカー等の下請け・孫請け等をよしとして現在に至っているのではないかと考えています。そこには、繊維産業に携わりながら新たな繊維産業関連の起業、製品開発・市場開拓に挑戦しようとする姿は、残念ながら少ないように思います。地場産業と認める繊維産業界の発展を望むことは勿論のことです。しかしながら、現在の本市における繊維産業界全体の発展を目指すことは現状では困難なことではないかと考えます。

地場産業とは何かと言われたとき、私は繊維産業等も地場産業であるとは思いますが、それに囚われる事なく、新たに起業するものでもいいと思っています。地場産業は創造し、つくりだしていくものだと考えています。

一般的には、起業した事業におけるその専門性は高いものの、ビジネスとしては資金調達や市場開拓、技術開発等が伴わなければなりません。その専門性以外の不得手な分野に対する人的・資金的等の全面的なフォローが必要である。

その仕組みを構築し実績を積み重ね続けられるように、行政が旗振り役を担い、システム構築後は行政の手を離れ、その組織に委ねることが肝要である。

後継者問題は、地場産業であれ新たな起業であれ、安定した利益が確保できれば、後継者問題の一番の要因と思われる一つが解決し、持続可能なビジネスが確立すれば自ずと後継者問題は解決するのではないかと考える。

- ・ 岸和田の「地場産業」をどの範囲で考えるか。

「新戦略プラン（改訂版）」や「伝統工業」の冊子、「大阪の工業」の統計などにあたった。岸和田の製造業の事業所数ではせんいと金属工業が多い。どちらも高付加価値の生産に難があるが、せんいは伝統産業でもあり、新しい取り組みがあれば取り上げていいのではないか。

漁業や農業も府下有数の産出を誇っている。漁業では、プランによれば「豊富な資源、市場、加工能力を生かし、市場拡大を行なう」と今後の発展の方向が示されている。

「地場産業の発展」のテーマについて、このような岸和田に根付き、しかもこれからの発展の可能性を考える討論をすすめて行けばいいのではないか。

「次回に向けて」 平成 28 年 9 月 21 日 午前 10 時～

第 3 回政策討論会では、産業政策課を招聘して、現在進められている『産業振興新戦略プラン』について説明を受けたうえで、岸和田市の現状について討論する。